

今週の火曜日、6月29日は、使徒聖ペテロ・使徒聖パウロ日です。現在の教会暦からは、こうした祝日と主日が重なった場合でも、主イエスに関する祝日を除いては、翌日の月曜日に移動し、主日は主日礼拝としてまもることになりました。これは、主日が主イエスの復活を記念する日であり、他の祝日に優先しておこなうべきであるとの考えによるものです。こうした考えによって主の復活にまでさかのぼる祝日である、主イエス命名の日、被献日、主イエス変容の日以外の祝日は主日に記念することがなくなったわけです。文語の祈禱書時代に用いられておりました公会暦では、主日と祝日が重なった場合は祝日を優先して記念し、主日の特権を第二特権として用いることになっておりましたので、主日に祝日を記念することも多く、わたしたちも祝日に関心をよく持っていたと思いますが、現在はそれがなくなり、祝日への関心が薄れていくことが心配されています。そこで本日は最初に、使徒聖ペテロ・使徒聖パウロ日について学びたいと思います。

使徒言行録を読んでまいりますと、使徒聖パウロは3回にわたる宣教旅行を終えた後、エルサレムへ向かう途中でユダヤ人たちの企みによって捕らえられ、裁判にかけられてしまいます。ところが総督はユダヤ人たちに気に入られようとして正しい裁判を行おうとしなかったため、パウロはローマ皇帝に上訴を申し出ます。ローマへの旅は途中激しい嵐に遭遇する苦難の旅となりましたが、その困難を経てパウロはローマに到着し、裁判を待っているところで使徒言行録は終わっています。こうしたことからパウロがローマにいたことはかなり確実であったと思われる。

一方ペテロは、新約聖書にローマへ行ったという詳しい記述はありませんが、60年代に至り、ローマへ来ていたと言われています。

64年、ローマで三日三晩続く大火事が発生しました。この原因については詳しく分かっておりませんが、一説には当時のローマ皇帝ネロによるものではないかと言われています。そしてネロはこの大火事の責任をキリスト教徒たちになすりつけ、大迫害を行いました。円形劇場にキリスト教徒を集めて、猛獣たちに食い殺させたと言われています。ネロはその様子を、歌を口ずさみながら眺めていたとのこと。

迫害の手が迫ってきたとき、教会の人々はペテロにローマから逃れるように勧めます。今命がなくなってしまったらキリスト教徒たちはどうなるのかと、必至にペテロへの説得を続けます。ペテロは最初それを受け入れようとしませんでした。最後は説得に応じローマから逃れようとしています。そこへ主イエスが現れ、ペテロは「主よ、どこへ行かれるのですか」と尋ねます。この言葉は、最後の晩餐の席で、主イエスが十字架の受難について話されていた時、ペテロが主イエスに言ったのと同じ言葉でした。主イエスは「あなたがローマを捨てるのなら、わたしはローマへ行ってもう一度十字架につこう」とペテロに語りかけます。ペテロは再びローマへ引き返し、二度と戻ってくることはありませんでした。殉教の際ペテロは、主イエスと同じ十字架では恐れ多いと、逆さ十字架にかけられて殉教したといわれています。この「主よ、どこへ行かれるのですか」という言葉はラテン語でクォーバディス・ドミネと言いますが、この言葉をタイトルとした有名なペテロの物語があるのは皆様もよくご存知の通りです。

そしてパウロもまた、滞在していたローマにおいて殉教したとされているのです。

殉教の月日は正確にはわかっておりませんが、二人の遺骸は教会の人々によって安全な場所に保存され、300年近くが経過した354年6月29日に、それぞれの順境の場所に建てられた記念聖堂に移されました。こうしたことから6月29日が、ローマで殉教した初代教会の二大指導者、使徒聖ペテロ、使徒聖パウロの記念日となったのです。

ペテロは主イエスの12弟子、あるいは12使徒の中で最年長者であり、最も重んじられた人でした。主イエスが天にお帰りになった後は、聖霊を受けてエルサレム教会の中心人物として活躍することになりました。

パウロは最初主イエスを迫害する者でしたが、ダマスコへ向かい途中で主イエスの光に打たれ、生き方が180度かえられて、主イエスを宣教する者とされました。最初に触れましたように、地中海沿岸各地を3回にわたる宣教旅行で訪ね歩き、それぞれの地に教会が誕生する大きなきっかけをつくりました。そして新約聖書の約半分にわたる手紙は、このパウロから各地の信徒たちにあてた手紙になっていますパウロは最大の伝道者、最大の神学者と言われるのはこうした理由によります。

この二人の殉教は、当時の教会の人々に大きな衝撃を与え、不安をもたらすことになりました。そしてさらに迫害は続き、90年頃には再来のネロと言われたローマ皇帝ドミティアヌス帝が迫害を行います。当時のことはヨハネの黙示録に見ることが出来ます。2世紀にはキリスト教が、ローマにおける公式に非公認宗教と規定され、国を挙げて、組織的な多くの迫害が行われるようになります。この苦難の日々は、コンスタンティヌス帝は313年ミラノ勅令を發布してキリスト教を合法宗教とし、392年にはキリスト教がローマの国教とされたのです。このように考えますと、使徒聖ペテロ・使徒聖パウロの殉教は約250年にわたって続くキリスト教迫害時代の幕開けを意味していたのです。

しかしこのような激しい苦難においてもキリスト教は滅びることはありませんでした。彼らが命をかけてまいった種は、立派に成長し、実を結び、距離と時間を超えて世界に広まっていくことになったのです。日本もまた世界有数の迫害が激しかった国であるといわれていますが、わたしたちの信仰生活は、こうした苦難を経た歴史の上に成り立っており、信仰の先輩たちが命をかけて守り支えた上にあることを改めて思わされます。

これからの時代は、価値観の多様な中であって、近年頻発している様々な宗教にまつわる事件を背景に宗教への信頼が薄れ、自己中心な、神を求めようとしない時代が続いていくのではと思わされます。人間は皆明日を知ることが出来ません。自分の力の無力さと、自分だけではどうしようもないなかで生きている人間にとって、主なる神の存在はなくてはならないことを、これから生きる私たちはしっかり心に刻まねばならないでしょう。使徒聖ペテロ・使徒聖パウロ日を迎えるに当たり、わたしたちの信仰が命をかけて受け継がれてきたものであることを改めて覚え、今を生きる私たちに与えられている主なる神よりの使命を新たにしたいと思います。